中学校

平成11年度

教育研究員研究報告書

国　語

東京都教育委員会

平成11年度

教育研究員名簿（国語）

班	地区名	学校名	氏名
一班	中野	第五中学校	杉田あゆみ
	板橋	板橋第四中学校	近藤政男
	足立	第十中学校	藤田哲夫
	青梅	第二中学校	若林秀一
	町田	町田第二中学校	武藤了
	町田	南中学校	加藤綾子
二班	台東	駒形中学校	加藤正恵
	江東	深川第七中学校	大塚和人
	大田	貝塚中学校	寺井郁男
	北	飛鳥中学校	増川孝
	練馬	大泉第二中学校	○ 大野ゆきみ
	江戸川	二之江中学校	大林博
	小平	小平第三中学校	古川浩
	保谷	保谷中学校	◎ 藍澤昌良

◎ 世話人　○ 副世話人

担当　教育庁指導部中学校教育指導課指導主事　田中洋一

目次

Ⅰ　研究主題設定の理由 …… 1

Ⅱ　研究の構想
1　基本的な考え方 …… 2
2　研究の方法 …… 3

Ⅲ　研究の内容
1　1班
(1)　ねらい …… 4
(2)　指導の実際 …… 5
(3)　まとめ …… 13
2　2班
(1)　ねらい …… 14
(2)　指導の実際 …… 15
(3)　まとめ …… 23

Ⅳ　研究のまとめと今後の課題 …… 24

研究主題

互いの思いや考えを伝え合う力を育てる指導法の工夫

Ⅰ　研究主題設定の理由

伝え合う力の育成は、25年前のユネスコ総会において、教育政策の７原則の一つに挙げられている。「互いの価値観や考え方を知らないことで、互いに疑惑と不信を招き、このことが戦争の原因になった」（ユネスコ憲章1946年）という反省と、その打開策としての提言である。互いに何を考え、何に悩み、何に痛みや喜びを感じているのかが分からないという戦前の国家間の社会状況は、そのまま現在の日本国内の人間関係の中にも見られるのではないか。

現在の子どもを取り巻く社会現象に目を向けると、人と人とのかかわりがもてない傾向が強まっているようにみえる。町中では駄々をこねる子どもが極端に減った。わが子との煩わしい関係を避ける親が増えたためか、躾（しつけ）を含めた真剣な親子の会話の機会が減りつつあり、子どもの側から見れば重要な異世代間のやりとりが減少したと見てとれる。少子化の進行や習い事の多様化などから公園で遊ぶ子どもも少なくなっている。同世代間の付き合いの幅は一段と狭まり、また、その繋（つな）がりは弱く希薄になっているように感じられる。

子どもたちの言語環境の変化も著しい。『青少年白書』（総理府）によれば、中学生の年間テレビ視聴時間は年間授業時間数とほぼ同じだという。一つの情報を多数の人に一律に伝えようとするマスメディアに長時間接する子どもたちは、本来言葉がもつ「多義性」、つまり同じ言葉でも人によってとらえ方が違うという面と、「奥行き」、つまり一つの言葉でもじっくりと時間をかけて考えることによって新たな見方が生まれるという面をほとんど意識しないまま日常生活を送っているのではないか。また、一方的に聞くのみで、自らの意見を返すことをしないという環境に浸っていれば、当然のことながら自らの思いを他者に伝えるという能力は低下し、人と接することも避けがちになる。「敬語は敬意を表すためのものではなく、人と一定の距離を保つためのものに変わった。」という巷（ちまた）の言葉がそれを的確に表している。

人は、言語によって思考し、言語によって互いの心の内を察しようとするが、相手の発した言葉を吟味したり、言葉の奥行きを探ったりすることが疎（うと）んじられる傾向が強まれば、近い将来、人間味に欠けた寒々とした社会が到来しないとも限らない。事実、学校現場では、他者の思いや迷惑はさておいて、自分の都合だけで考え行動する傾向の強い子どもが増えてきている。人格形成上の深刻な問題が広がりつつあるとも言えるのである。

このような状況を踏まえ、本部会では、異なる背景の者同士が、個々に感じた事柄や、思いを寄せた内容などを語り合い、その価値を認め合いながら意見交換ができる機会を与えたいと考えた。他者が発した言葉が自らの深い思考を誘うことに気づき、さらに互いの生き方や考え方、体験に思いを巡らせることで、新たな人間関係が構築できると考えたのである。

しかし、教師の多くは、心の中の思いを互いに真正面から受け止め合い、素直に返していくという関係を築いていく方法を身につけてきてはいない。それ以前に、話し合いの場などで、殊に情緒にかかわる自らの意見を真摯に表明するという話し方の演習すら受けてきた者は少い。指導者が経験していないという難しさはあるが、この社会が求めている「伝え合う力」を育てるという緊急の課題への取り組みが不可欠のものと考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究の構想

1　基本的な考え方

研究を始めるに当たって生徒の実態調査を行った。最近の中学生の話題、話し相手、会話内容やその深さなどを確認することで、具体的な研究の指針（方向）が定めやすくなると考えたからである。調査はアンケート形式で３校（中学生420人）を対象に行ったが、予想していた状況が３校に共通していることが浮かび上がった。つまり、普段よく話すのは「同学年の友人」であり、話題は「学校生活で起こったこと」や「テレビ番組について」が圧倒的に多く、「ニュースや社会的な問題について」「自分の悩み」「将来について」等、深刻になりがちな話題は避ける傾向にある。この傾向を打開するためには、普段親しくしていない人とも誠意をもって向き合い、深い思考を必要とする話題について互いの思いや考えを伝え合う場を設定し、そうすることで得られる、他者をより深く理解する喜びや本当の自分を分かってもらえたときの充足感を味わえるようにすることが大切だと考え、その手だてを検討した。

それにはまず、指導者が提示する「話題＝題材」に“魅力があること”が重要なポイントになると考えた。「テレビの人気番組について」のような気楽な話題は、会話をはずませるかもしれないが、人間の内面にかかわる発言や内容の深まりは期待できず、相手の言葉を真剣に聞く態度や、自分の思いや考えを整理して分かりやすく伝えようとする姿勢には結びつかない。このような態度・姿勢を自然に引き出すことのできる話題（題材）選びは、次の段階に進むための土台になるので慎重に行い、適切な話題の選定に努めた。

次に、その「話題（題材）」について、話す内容を整理するのに適切な形式を与え、手順を示すことにより、生徒が発言しやすい環境を整えた。そして、次の段階として「発表する場」を与えた。そこで発表者が取り上げた「言葉」を軸に、それはどのような状況で発せられたのか、発した人の表面には出てこない本当の気持ち等、「言葉」の背後にあるものに思いを及ばせることによって、「言葉」のもつ『意味の厚み』に気づかせるようにした。そうすることで、言葉はその場限りで使い捨てられていくものばかりではなく、時を経ても心によみがえってくる重みをもっており、時には、自分の生き方を変えるほどの力をもつものであったりすることに気づくことができると考えたからである。

さらに、『言葉の厚み』に思いを馳せられる「聞き手」を育てることは、言葉を大切にする「話し手」を育てることにもつながるという重要な意味をもつものと考えた。そこで、話し手の話す内容を精選することで聞き手が興味をもって聞くことのできる状況を作ると共に、聞き手に対しては得た情報を整理しやすい形式を与えておき、単に聞き取るだけではなく、率直に誠意をもって話し手に返していかれる場を設定した。これによってお互いの人間性に触れ、話し合いを意義あるものとしてとらえさせることを目指した。

以上のような流れの中で、「互いの思いや考えを伝え合う力を育てる」という研究主題が達成できると考えた。

2　研究の方法

前述の基本的な考え方に立ち、二つの班に分かれてそれぞれ指導法の工夫・改善を重ねながら、次のように研究をすすめた。

1　班

1班では本研究の推進にあたって「読むことの学習をとおして」という副主題を設定した。一つの作品を異世代の人たちと共に読むという作業の中から、互いに伝え合う力を育てることができるのではないかと考えたからである。また、今の中学生の付き合いは、同じ興味・関心をもつ同世代の友人知人に限定されがちであるから、普段接することの少ない異世代の人との交流に焦点を当て、地域に住む人生経験豊かな大人に授業に参加してもらうことにした。両者が共に興味深く読むことのできる教材を選び、それを一緒に読み深めることで自ずと伝え合いが生まれる。この授業をとおして中学生にとっても異世代の方にとっても新鮮な驚きと感動を得られると考えたからである。

話し合い活動の場面では、班内、学級全体、異世代の方を交えて、と多様な形を設定し、それぞれの段階を経るごとに、体験の違いや価値観の相違によって言葉のとらえ方は様々であることに気づかせるようにした。また、異世代の方との授業を終えた後にお礼の手紙を書かせることで、読みの深まりを再認識させることにした。

これらの活動をとおして、人間関係を豊かにし、視野を広げつつ、互いの思いや考えを伝え合う力の育成が可能となると考え、研究を進めた。

2　班

2班では本研究の研究主題をもとに、「体験発表会をとおして」を副主題として設定した。文献研究として、意見の交換に関わる文献、先行研究等、コミュニケーションや語彙論の資料を収集し検討を重ねた。しかし、教科書等で、このテーマを直接取り上げている事例がないため、特設単元『心に残った言葉』を設定した。

「伝え合う」ためには聞き手と話し手の双方の育成が大事であると考え、自らの言葉の感動体験を振り返らせ、全員が体験スピーチを行い、それについての感想を出し合う場を設定することで、発表についての質問や感想を述べることも重要な表現活動として位置づけた。聞き手から質問や感想が述べられることにより、発表の価値そのものが高められていくと考え、発表者と聞き手の質問や感想のやりとりに注目させ、その感想を述べるという「感想の交流」を行ったのである。班単位での感想の交流、クラス全体での感想の交流と2段階を設けることによって、伝え合う価値をより深め、互いの思いや考えを伝え合うことの大切さを認識していけると考え、研究を進めた。

Ⅲ　研究の内容

1　1班

(1)　ねらい

日頃、生徒は電話や電子メールなど様々な情報交換の手段をもち、状況に応じてこれらを使いこなしている。身近な同世代の仲間と、興味や関心のあるたわいのない話題で、気軽に感覚的な会話をすることはできる。しかし、世代や環境の違う他者と一つの話題を深く真剣に話し合う機会はめっきり少なくなってしまっていて、親和感のない相手と会話をすることに慣れていない。そのため人間関係も広がらず、積極的に相手を理解しようとする気持ちが育ちにくい。また、その手段も身についていないのが現状である。

互いの思いや考えを伝え合うためには、価値観の違う相手の気持ちや考えを積極的に理解しようとする意欲と、自分の気持ちや考えを大切にして自分の言葉をとおして伝えようとする態度が大切である。それを身につけさせるために、次の二点を考慮した。

一つは他者と話し合う機会を意図的に設けることである。とりわけ異世代の方と一つの作品を読む機会をつくることとした。それぞれの世代が共通の話題をとおして思いや考えを述べあうことでお互いが共感したり共鳴しながら相手の気持ちや考えを理解しようとすることができるようになる。また、主題や文章に表れているものの見方や考え方を理解するてだての一つとして、自分とは異なった様々な価値観があることを知る必要がある。異なる価値観を認めたり、反論しながら自分の考えをさらに発展させていくこともできるものと考えた。

もう一つは、自分の考えを的確に話すために自分のものの見方や考え方をしっかりもたせるように授業で配慮することである。人間・社会・自然などについて深く考えられる教材を検討し、平和や国際理解・環境問題など様々なテーマで生徒の心を揺さぶり自分の意見や考えを明確にすることができる作品を選択する必要があると考えた。

この授業をとおして、生徒が自分の考えをしっかりもちながら相手に伝え、価値観の違う相手に配慮しつつ相手の考えを受容し、さらに自分のものの見方や考え方を広くすることができ、伝え合う力が身につくものと考えて、検証を行った。授業を進めるうえで以下を留意点とした。

①作品を読んで疑問や感想をはっきりさせる。
②疑問を、「自分で調べられるもの」、「異世代の方に聞いて分かるもの」、「異世代の方と考えるもの」に分類する。
③疑問について自分の意見や考えをはっきりさせ、生徒同士が進んで話し合えるようにする。
④異世代の方の意見を聞きながら話し合いができるようにする。
⑤話し合いのルールを理解し、相手への配慮ができるようにする。
⑥授業をとおして学んだことを話し合いの場面に生かせるようにする。

(2) 指導の実際

① 【研究主題との関連】

副主題「読むことの学習をとおして」

本研究においては、文学教材を読むことの学習をとおして、互いの思いや考えを伝え合う力を育てる指導法を工夫した。普段行われている生徒と教師だけの学習活動ではなく、環境や価値観の違う異世代の方を交えての話し合い活動という取り組みを考えた。

研究を進めるにあたり以下の点に留意した。

・異世代間であっても共感をもち合える教材を選定すること。
・疑問点について、自分なりの考えをもち意見交換ができること。
・授業に参加していただく方に、授業のねらいを理解してもらうこと。

指導計画としては、まず教材を読んでの生徒一人ひとりの感想や疑問をもとに、班や学級での話し合い活動の場面を設定した。異世代の方と話し合う上で、聞きたいことや一緒に考えたいことを分類したり、それに関する意見交換をしたりするようにした。こうした取り組みにより、話題を整理するとともに生徒一人ひとりの考えを深めることができると考えた。

そして、生徒にとって異世代の戦争体験者の方との話し合いの場面を設定した。一つの文学教材を読みながら、戦争体験のない生徒が、時代背景や登場人物の心情に関して、戦争体験者の方と互いの立場から思いや考えを伝え合えるようにした。生徒は教わるだけでなく、感性の違う相手と共感し合いながら、さらに教材の読みを深めることができると考えた。

② 【教材】『大人になれなかった弟たちに……』(国語　1年　光村図書)

③ 【教材観】

「僕」が国民学校四年生のときに生まれた弟のヒロユキは、戦争が終わる18日前に栄養失調で死んだ。ひもじさのために「僕」はかわいがっていた弟のミルクを、悪いことと知りつつ何回も盗み飲みしてしまう。弟を死に追いやった栄養失調に手を貸してしまったという自責の念は「僕」から離れない。この生まれてから死ぬまでのわずかな時間の弟との思い出、そして、自分たち子どもを必死で守ろうとする母親との思い出が語られている。

こうしたことからこの教材は、世代を越えて、多くの人の心に訴えるものが大きい。当時の人々の生活状況に興味・関心をもちやすく、登場人物の心情に対する多様な考えももちやすい。同世代の生徒同士はもちろん、異世代の戦争体験者の方とも話し合い活動をしながら、互いの考えを伝え合い読みを深めるのに適当な教材である。

④ 【指導目標】

ア　文学作品を読み、互いの感想や疑問を伝え合うなかで、ものの見方や考え方を深める姿勢を育てる。

イ　話し合い活動をとおして、互いの世代を超えての感じ方や考え方の違いに気づくことができる共感的な姿勢を育てる。

ウ　自分の思いや考えを聞き手に理解してもらえるように、分かりやすく伝える力を身につける。

エ　話し手の伝えたいことを受けとめ、それに対する自分の考えをもち、新たに思考する力を身につける。

【指導計画】（6時間扱い）

時	学　習　活　動	指導上の留意点
1	・説明なしで範読を聞く。 ・各自感想及び疑問を書く。 ・今後の授業の流れを確認する。 ・話し合いのルールを決める。	・記入用紙を渡して箇条書きにさせる。 ・教材のどの部分についてのことかが分かるように書かせる。 ・戦争体験者の方に来ていただいて一緒に読みを深めること。そのためにまず、自分なりの考えをもたなければならないことを伝える。
2	・疑問や感想を班の中で話し合う。 （6つの班を使う。） ・感想と疑問に分け、記録係が短冊に書く。 （短冊は教師が用意） **☆疑問を次の3点に分類する。** A　調べれば分かること。 B　体験者の方に聞きたいこと。 C　体験者の方と一緒に考えたいこと。 ・班の代表者が全体に発表する。 **☆疑問Aについては次の授業までに調べてくる。**	・前時に書いたことをもとに必ず全員が発言できるように配慮する。 ・プリントNo.1を使い、できるだけ簡略にまとめさせる。 ・同じ内容のものは一つにまとめさせる。 ・読みを深めたいところは、随時指導者が助言する。
3	・文章の流れに沿って、それぞれの疑問や、感想に対する意見を述べあう。	・前時に作成した短冊を黒板に貼っておく。 ・自分が提示する疑問に対しては、あらかじめ自分なりの答えを出させておく。
4	・前時の続きを行う。 ・戦争体験者の方と話し合う上で、気をつけなければならないことを確認する。	・あらかじめ依頼しておいた戦争体験者の方に参観していただき、これまでの授業の流れを理解していただく。

時	学　習　活　動	指導上の留意点
5	・戦争体験者の方とともに、さらに読みを深めていく。 ・戦争体験者の方を交えて話し合いを行う。 ・疑問のうち、第２時で示したＢ・Ｃを中心に、自分の考えを述べ、体験者の方に考えを聞く。 ・お互いの感想を述べあう。 ・来ていただいた体験者の方の授業に対する感想を聞く。	・体験者の方をクラスに一人招き全体で話し合いをさせる。 ・積極的に、生徒に発言させる。 ・聞くだけの一方通行にならないようにし、自分の考えも、きちんと述べさせる。
6	・今回の授業を通じて、学んだことや読みが深まった部分について話し合う。 ・上記のことをまとめて、戦争体験者の方にお礼の手紙を書く。 ・自己評価を、アンケート用紙に記入する。	

【本時の展開（第５時）】指導案（体験者クラス一人）　　**○話し合いの司会＝教師**

	学　習　内　容	学　　習　　活　　動	指導上の留意点
導入	・地域の戦争体験者の方の紹介 ・本時の学習内容の確認	・前時までに出された感想や疑問を、来ていただいた体験者の方に投げかけ、話し合って読みを深めていくことを確認する。	
展開	・体験者の方との話し合い活動	・次の各事項について、質問者が自分の考えを述べ、体験者の方の考えを聞く。 《以下は予想される項目》 1　「僕」がヒロユキのミルクを盗み飲みしたことについて。 　それに対する母の思いについて。 2　疎開の相談に行った時の親戚の人の対応について。 　そのときの母の表情や態度について。 3　疎開先の情景について。 4　ヒロユキを「幸せだった」と、母が言ったことについて。 5　敵機が美しく見えたことについて。 6　母が初めて泣いたことについて。 7　「僕」が「忘れない」と言っていることについて。 8　カタカナ表記について。 ・体験者の方とのやりとりの中で、別の考えが生まれるなどの変化があったときには、きちんとメモをしておく。	・感想なのか疑問なのかをはっきりさせる。 ・質問者と違う考えのものには発言を促す。 ・体験者の方の考えはメモを取りながら聞くように指示する。 ・話し合いによって、読みが深まった部分を整理させる。
まとめ	・本時のまとめ	・体験者の方にお礼の言葉を述べる。 ・体験者の方の感想を聞く。	・あらかじめお礼を言う生徒を決めておく。

【本時の評価】

1．文学作品を読み、互いの感想や疑問を伝え合うなかで、ものの見方や考え方を深める姿勢が育ったか。

2．話し合い活動をとおして、互いの世代を超えての感じ方や考え方の違いに気づくことができる共感的な姿勢が育ったか。

3．自分の思いや考えを聞き手に理解してもらえるように、分かりやすく伝える力が身についたか。

4．話し手が伝えたいことを受け止め、それに対する自分の考えをもち、新たに思考する力が身についたか。

【本時の展開（第５時）】副指導案（体験者は班に一人以上）　　○話し合いの司会＝教師

	学習内容	学習活動	指導上の留意点
導入	・地域の戦争体験者の方の紹介 ・本時の学習内容の確認	・前時までに出された感想や疑問を体験者の方々に直接聞き、話し合って読みを深めていくことを確認する。	・班毎に行うので、体験者の方や、生徒の意志の疎通ができているかを確認する。
展開	・体験者の方との話し合い活動	・各班に一人から二人の戦争体験者の方に話に加わってもらう。 ・自分たちで考えた質問内容の中で、整理した質問をいくつかなげかけ、返ってきたことを記録する。 ・質問したことにより、特に読みが深まった部分を整理する。	・感想なのか疑問なのかをはっきりさせる。 ・教科書のどの部分かを確認させる。 ・疑問Ｂ（体験者に聞きたいこと）なのか、Ｃ（体験者の方と一緒に考えたいこと）なのかを整理させる。 ・体験者の方の考えはメモを取りながら聞くように指示する。
まとめ	・話し合い活動のまとめ	・班ごとに、学習者側が質問して読みを深めた内容をまとめ、発表する。 （生徒が黒板に紙〔質問用紙〕を貼る。） ・体験者の方の感想を聞く。	・時間の関係もあるので簡潔に発表する。 ・時間の関係上、短いコメントにしていただく。

－資料についての説明－

資料１について

今回の授業では、戦争体験者の方に、いかに協力してもらえるかが、大きな鍵となる。したがって、事前にこのような形式の手紙を該当の方に渡し依頼する。またその後で、授業の内容についても細かく説明し、理解を求めるようにすることが大切である。

資料２について

疑問点の整理は生徒に行わせる。その際にＡ「調べれば分かること」、Ｂ「戦争体験者の方に聞いてみたいこと」、Ｃ「戦争体験者の方と一緒に考えたいこと」の３点について、生徒に分類させることが大切である。その際に、適切な指導者の支援・援助が必要である。

資料３について

授業の感想やお礼を生徒に書かせる。その際に、「どんなことが分かったか。」また「戦争体験者の方と一緒に作品を読んでどんな感想をもったか」等、具体的な感想を率直に書かせるように指導する。

資料４について

整理した疑問点Ｃ（戦争体験者の方と一緒に考えたいこと）を班の中で話し合わせ、自分の意見と他の班員の意見を比べさせる。また、戦争体験者の方との話し合い後の自分の考えを書かせ、読みの深まりや自分の考えの根拠を明確にするように指導する。

（資料１）

平成11年９月10日

様

東京都板橋区立板橋第四中学校
校長　大沢　鷹邇
教諭　近藤　政男

国語科授業参加ご発言のお願い

前略　板橋第四中学校の教育活動には、日頃深いご理解ご協力を賜り誠にありがとうございます。さて突然のお願いで恐縮に存じます。

本校国語科の授業で、戦時中、国民学校児童だった人の、食物の不足、疎開先での苦労、栄養失調で弟を亡くした話を教科書で一緒に読み、中学生のわからない所を教えていただき、戦争の悲惨さ、平和の大切さを学ばせたいと計画しています。

つきましては、戦時中都会や疎開先で、食物に苦労し、買い出しや、配給で生活した体験を生徒に答えていただける方を、どなたか紹介していただけたらと思い、お願い申し上げます。

下記ご都合のつく方で、授業にご協力いただける方を是非ご紹介下さるようお願い申し上げます。

記

授業の日　平成11年10月４日（月）５校時　13：30～14：20
連 絡 先　板橋第四中学校　3962－4325　教頭宛
恐れ入りますが、９月16日（木）までにご連絡下さい。

（資料２）

（資料　２）

疑問記録用紙

[　　]班　班長 [　　] 記録係 [　　] 短冊係 [　　]

★疑問は次の三つに分類しＡ・Ｂ・Ｃを先頭の□に書くこと。

Ａ　調べればわかること

Ｂ　戦争体験者の方にうかがってみたいこと

Ｃ　戦争体験者の方と一緒に考えてみたいこと

疑問

1	A	P	118	12	行目からの部分について 渓流
2	A	P	118	14	行目からの部分について 桃源郷
3	B	P	120	10	行目からの部分について 疎開者にはなぜ配給がないのか
4	B	P	120	12	行目からの部分について やぎの乳はどんな味か
5	C	P	117	4	行目からの部分について なぜヒロユキの大切なミルクをぬすみ飲みしたのか
6	C	P	117	13	行目からの部分について しんせきの人は話の内容も聞かずに うちには食べ物かないといったのか
7	C	P	122	4	行目からの部分について 敵の飛行機なのに美しく見えたのはなぜか
8	C	P	123	10	行目からの部分について 母はなぜヒロユキが死んだあと初めて泣いたのか
9	C	P	122	10	行目からの部分について ヒロユキは幸せだったと言っているのはなぜか
10	C	P			行目からの部分について ヒロユキの名前はなぜカタカナなのか

（資料３）

Ａ　さんへ

大人になれなかった弟たちに……

授業の感想とお礼

一年　組　番氏名

先日は、お忙しい中、中野五中に来て下さって どうもありがとうございました。私は祖父母以外戦争を体験された方とお話しをしたのは、初めてでした。とても緊張してしまい、声が小さくなって聞きづらかったと思います。でも Ａ さんは にっこり笑って「もう一回！」と言って下さいました。その時 すごくうれしかったです。私は質問してみて私達 子供と戦争を体験された方の考え方が似ている所と違う所があることに気がつきました。似ている所は「何故ヒロユキの名前を最初に出したか」という所です。違う所は、お母さんが僕に「帰ろう。」と言って何故言い返さなかったのか？という所です。私は、その頃は、言い返す言葉がなかったからだと思いました。でも Ａ さんは「頭を下げている所を子供に見られたくなかったから。」とおっしゃいました。私は私がわからなかった事を教えて下さってうれしかったです。Ａ さんとお話しをした日の帰りにコードの前を通ったら Ａ さんがいらしてびっくりしました。私と友達が「さようなら。」と言ったら、Ａ さんがにっこり笑って下さったのを覚えていらっしゃいますか？今度 お会いした時 またお話しがしたいです。そして また このような機会がありましたら、どうぞ よろしくおねがいします。来て下さって本当に 本当にありがとうございました。

第一学年　国語科学習資料

大人になれなかった弟たちに……疑問整理

一年　　組　　氏名（　　）

Ｃ　一緒に考えたい疑問

疑問種類	場所 P. L.	疑問	自分の考え / 班員の考え	話し合いをしたあと考えたこと
	P.114 L.1	なぜ物語の初めに弟の名前を出したのか？	最後の「弟の死は一生忘れません」のように、話の中での弟を読者に印象づけ忘れないでほしかった ・強く強調するため　・主人公だから ・大好きだから　・伏線	弟のことをみんなに忘れないでほしいから
	P.117 L.6~8	「僕は弟がかわいかった」のになぜミルクを飲んでしまったのか？	わかっていても甘いミルクは恋しかったから 甘いものがなかったから	甘いものもなかったが空腹にたえられなかった
	P.117~118 L.14・1	母は僕に「帰ろう」といってなぜ言い返さなかったのか？	くやしかったけれどとてもとても悲しくつらかったから 親せきの人も苦労しているんだと思ったから	親せきの人たちの苦労している気持ちもよくわかったから
	P.118 L.2~5	強くて悲しくて美しい顔とはどんな顔か？	食べ物をもらいにきたとかんちがいされた悲しみと、子供を守らなくてはならない母の強さがいっしょになり美しく見えた 悲しさと強さがいっしょになって美しく見えた	聞く前と同じ
	P.122 L.2~3	なぜ遠慮してバスにのらなかったのか？	他の人にめいわくがかかるから	弟との最後の時間をゆっくり過ごしたかった （授業で同級生の意見をきいて納得した）
	P.117 L.12~13	親せきはなぜ「食べ物など ない」ときっく当たったのか？	みんな、戦争中で自分のことで精一杯だったから。他の人の分もめんどう見きれないと思った	理由は聞く前と同じだが、きっと、親せきの人も心のどこかでは主人公たちを助けたかったのだと思う
	P.122 L.5	爆弾を落とす機械でも美しいと思うのか？	泣いてはいないが、少し目に涙がたまって（こらえて）いたのではないか？ 涙で目がうるんでいた	きらきらしてかっこよく見えたという話をきいて、主人公も男の子なので新型の飛行機を見てかっこいいと思ってしまった

(3) まとめ

① 考　察

ア　教材について

本教材「大人になれなかった弟たちに……」は、生徒にも戦争体験者の方にも、受け入れられやすい教材であると同時に、互いに興味関心をもちながらも、それぞれの違った実体験に基づいた解釈、感想が出されるため、互いの意見交換に適した教材であったといえる。

イ　生徒が自分の意見をもつということ

初発の感想の相互発表、そして意見交換、さらに、疑問点の分類という取り組みが、生徒自身の意見、考えをもたせるうえでも、また、体験者の方が、話をするうえでも効果的であった。

ウ　異世代（地域の戦争体験者）の方の参加について

一読のみであっても、生徒はかなりの反応を見せるが、それに加え実際に戦争を体験した方の体験談を聞くことにより、さらにその内容が深まっていった。また、自分なりの意見、解釈を体験者の方に投げかけ、それに対して意見を聞かせていただくという学習活動は効果的であった。

エ　授業形式（体験者数「クラス１名」形式と「班１名」形式）について

体験者の方の参加を「クラス１名」（クラス形式）と「班１名」（班形式）との二形式で行ってみた。

その結果、クラス形式では、班形式と比べ、話し合いの時間までの取り組み（上記イ）が、全体で行われるため、共通の課題をともに考え、意見を交換しあうことができ、また、体験者の方との話し合いの場でも、一つ一つの話題に対し、よく集中し、次第に考えが深まっていく様子が感じられた。班形式の方が一人ひとりの発言の機会が増えるという利点もあるが、班の構成に左右される場合が多く、考えを深めるという点、最終的なまとめの活動等、さまざまな点でクラス形式の方が有効な面が多いということができる。

② 今後の課題

ア　今回の教材に限らず、話し合いの前に基礎的な事柄（時代背景、語句など）をとらえさせておくことが大切である。それが押さえられれば、他の教材、領域についても読みを深めるうえで、十分に有効な取り組みであると思われる。

イ　自由に話し合う場を設定することも良いが、１年生ということもあり、話し合いがスムーズにいかないことも十分に考えられる。したがって、生徒の中で、質問の分担をするなど、ある程度取り組み方や話し合いの形式を決めておくほうがよい。

ウ　戦争体験といっても、実際に戦地での体験のある方、内地にいた方の中でも、疎開経験のある方、ない方等の違いがあり、それによる解釈の違いが表れてくる。したがって、できるだけ主人公と同じ年代で、似た体験をされた方にお願いした方がよい。また、ある方が「この主人公は考えが甘いね」ということを口にされたが、生徒はもちろん我々も意外に思われる言葉が出される場合が想定される。したがって、その内容によっては、あらためてまとめの時間を設定することも大切である。

2　2班

(1)　ねらい

2班では、互いの思いや考えを伝え合う力を育てるために、まず学習者一人ひとりが言葉を魅力あるものにとらえることが重要であると考えた。言葉の微妙な意味がその場の状況と関連しながら、その人その人に大きな影響を与えている。それは、時に人を挫折に招き、また、人に栄光をもたらす。そういった言葉の両刃の威力を現実のものとして受けとめながらも、言葉がいかに人を感動させるものであるかを理解する中で言葉に対する関心を高め、言葉を魅力的に使いこなし、より正確に意思を伝え合う力を養うことをねらいとした。

同じ言葉を聞いたとしても、ある人は好意的に受けとめ、ある人は嫌悪感を抱く。その違いは、そこに至るまでの経験やそのときの状況、人間関係によって現れる。近年の中学生は、自分の発した言葉の真意が受けとめられないことを極度に恐れるあまり、「発言しない」「発言したとしても本音を言わない」「意思は常に曖昧にする」といった傾向が強いようである。このような傾向の中で、授業という公の場で中学生に発言をさせ話し合いを深めさせるためには、指導者側の入念な準備と働きかけが必要である。結論を急がず、意見の留保を認め、あるがままの思いをそのまま受け入れる雰囲気の中で、全員が話し合いに参加できるようにした。

課題は、言葉を魅力的に感じられるような環境の中で、全員が主体的に参加できるようにするために言葉についての各自の体験を発表し、それについて感想や質問を互いに語り合うことによって参加者の意識が高まり、発表の価値そのものも高められると考えて、学習を進めていった。互いの思いや考えを伝え合おうとするには、何より学習者自身の体験を素材とすることが有効であると考え、導入教材により言葉の重みや魅力に目を向けさせると同時に、自らの言葉の感動体験を振り返り、考えをまとめながらメモに書き留めたものを発表させた。また、聞く側もよい聞き手となるよう、「発表についての感想を述べる班」、「そのやり取りについての感想を述べる班」、「スピーチの題名を考える班」と分担することよって、ただ聞いているだけでなく、話し手の言わんとすることを的確に受けとめ、さらに高めようとする姿勢をもって聞けるような手だてを施した。

互いの意見を交換する形をとることで、学習者は自分とは異なった考えがあることに気付き、それを認めていくことによって視野を広めることができる。また、自分の思いや考えをまとめていく過程で思考力を身につけ、言葉の魅力についての新たな認識を深めていくことができる。その上で言葉を発することによって互いの思いや考えを伝え合う力を自ら育てられるようにした。導入教材は言葉に興味をもたせ、また言葉の魅力を感じられるものであるように配慮し、特に慎重に選択した。

言葉のやりとりについては、心の内面を表出することに重点を置いた。素直な気持ちで自分自身に対峙し、互いにことばの重みや魅力に心を入れながら自身の内面を言葉に表すことによって、言葉を単なる手段としてではなく、周囲との意思の疎通をより確実なものに使い、さらに、言葉を大切にする姿勢を養い、日ごろの生活にそれを反映させることによって日常生活に役立つ基本的な会話力の向上を目指した。

(2) 指導の実際

①【研究主題との関連】

副主題「体験発表会をとおして」

単元名「心に残る言葉」

2班では言葉の魅力に着目させながら、互いの思いや考えを伝え合う力を育てるために、次のような単元を構成した。

ア　学習者自身の言葉の感動体験を掘り起こし、それを単元の軸に据える。

学習者が本気で互いの思いや考えを伝え合おうとするには、何より学習者自身の体験によるものを素材とすることが有効であろうと考えた。そこで、導入教材により言葉の重みや魅力に目を向けさせると同時に、自らの言葉の感動体験を振り返らせた。そして、学習者の中から数名が全体の場でその体験スピーチを行い、それを巡って全員で感想を交流し合う場を設定した。しかし、自らの体験がない、もしくはそれを発表したくない学習者については、人から聞いた体験や本で読んだ体験を発表することでもよいことにした。

イ　伝え合う活動を活性化するための手だてを施す。

授業の中で扱われた文章についての学習者同士の感想を交流させる場を設定しても、それが十分に行われるケースは少ない。どちらかというと、指導者と一部の学習者との対話や問答のみで終わってしまうケースの方が多い。伝え合う力の育成は、例えば指導者の発問を工夫するといったことのみでは達成されることは少ない。そこで、学習者同士の伝え合い、ここでは感想の交流が十分に行われるようにおおよそ次のような手だてを施した。

- 班は指導者が構成する。グループ学習においては、班と班との間に学習に対する興味関心や習熟度による格差が生じてしまうと学習活動がスムーズに行われない場合が多い。このために、導入時のワークシート等で学習者の実態を把握し、それをもとに指導者が班を構成することとした。
- 発表会の司会の台本は司会者自身に作らせる。司会者には発表会の目的と進行の概要のみを知らせておく。これにより、進行の仕方をあらかじめシミュレーションさせておく。
- 発表者（言葉の感動体験スピーチを行う者）には事前に個人指導を行い、スピーチをよりよいものにしておく。
- 発表班以外の学習者はよい聞き手となるように次の役割を分担する。
  - (ア)　発表についての質問や感想を述べ、発表者とやりとりする班
  - (イ)　(ア)のやりとりについての感想を述べる班
  - (ウ)　スピーチの題名を考えて発表する班

これによりよい聞き手とは、ただ話を聞いているだけではなく、話し手から何かを得ようとし、交流しようとする能動的な姿勢で聞く者なのだということを自覚させた。

ウ　発表についての質問や感想を重要な表現活動として位置づけた。

このような発表会の場では発表者の表現活動のみが重視され、それに対する聞き手の

質問や感想などは軽く扱われることが多い。しかし、質問や感想が述べられることにより、参加者の意識が高まり、発表の価値そのものも高められるのである。そのように聞き手からの質問や感想は重要な表現活動なのだという意識をもたせるために、発表者と聞き手とのやりとりについて注目し、その感想を述べる班を前記の通りに設定した。

②【導入教材】「天声人語」「美味しいよ」

「天声人語」について

これは平成７年12月31日の朝日新聞のコラム「天声人語」の文章である。平成７年１月17日午前５時46分、マグニチュード7.2の大地震が阪神淡路地域を襲った。死者６千余人という大惨事の陰に、いくつもの感動的な場面があった。「もう行け！」これはがれきに下半身を挟まれた父親が、迫りくる炎を見ながら子どもたちを巻き添えにしまいと発した言葉だ。一般には高圧的で横柄な感じを受ける言葉だが、ここには最期の最大の愛情が凝縮されている。学習者たちは、この言葉を聞いて、はじめは辞書的に「命令されているようで嫌だ」「怒られているみたい」というように否定的な印象を受けるであろうが、言葉が発せられた背景を感じとるにしたがって、精美な受け取り方に変わっていくと思われる。言葉には、それを発した人の思いが込められている。その人の歴史が内在されている。言葉の多義性や奥行きを考えさせるための導入教材として適切であると考えた。

「美味しいよ」について

これは「心に残るとっておきの話」（潮文社編集部編、平成５年発行）に収められている文章で、筆者は彦田信義氏（昭和６年生まれ、元警察官）である。短くありふれた言葉であっても、心のこもった言葉がいかに大きな力をもち、人に感動を与えるものかということが一読して感じとれる文章である。また、この文章は、題名に掲げられている言葉の発せられた時の状況や背景が詳しく述べられており、このことが読む者の心を打つ効果的な役割を果たしている。こうした表現法は学習者が自らの体験を発表していく上で参考とするべき大切な要素である。こうしたことからこの文章は本単元の導入教材として適切であると考えた。

③【指導目標】

ア　言葉によって伝え合うことの価値（生産性や必要性）を体験的に気づかせる。

イ　言葉についての考えを深めさせ、言葉を大切にして心通い合う人間関係を築こうとする姿勢を育てる。

ウ　自らの体験や思いなどを分かりやすく伝える力をつける。

エ　質問や感想を適切に述べ、話し手との交流を図りながら思考していく力をつける。

④指導計画（全８時間扱い）

時	学　習　活　動	指導上の留意点
1	・指導者から本単元のおおよそのねらいについて聞く。 ・「天声人語」「美味しいよ」を読み、言葉の背後にある人の思いやその時の状況について考える。 ・言葉の体験アンケートを書く。 ①言葉の感動体験があるか。 ②それはどんな言葉だったか。 ③言葉によって嫌な体験をしたことはあるか。	言葉の多義性や奥行き、魅力等にふれさせながら、言葉についての考えを深めさせる。 ②は、その言葉だけを書かせる。 ③は、その有無だけを尋ねる。
2	・アンケートの集計結果を考察する。 ・改めて本単元の学習目標と学習の流れを指導者から聞く。	ここまでを本学習に対する動機付けとする。
	学習目標（学習者に提示） ＜こんなことを目指そう！＞ ①言葉によって互いの思いや考えを伝え合うことの大切さを知ろう。 ②言葉についての考えを深めよう。 ③互いのよさを発見しよう。 ＜こんな力をつけよう！＞ ④分かりやすく話したり説明したりする力をつけよう。 ⑤人の話をよく聞き、疑問や感想を発表できる力をつけよう。 ⑥話し合いを通して自分の考えを深められるようにしよう。	
	・自分の言葉の感動体験について書く。	５ＷＩＨ（いつ、どこで、だれが、どういう状況で、どのように感じた等）を意識して自分以外の他の人に感動内容が伝わるように書かせる。

時	学　習　活　動	指導上の留意点
3	・「言葉の感動体験」の班内発表会を行う。（資料１） ①１人がスピーチをする。（２分程度） ②他の班員が質問をする。 ③他の班員が感想を述べる。 ・スピーチの代表者を班で一人決める。	前時で書いたことをもとにしてスピーチし合う。班員の人数は６人程度とする。 共感した「なるほど」「いいなあ」 共鳴した「自分にもそんな経験があった」等、②③ともに話のよさを引き出すことを目的に行わせる。 他の班の人にも、共感や共鳴を与えるだろうと思われるスピーチを行った班員を一人選出する。
4	・班代表者のスピーチを班員全員で練り直す。（資料２） ・発表会の形式について指導者から聞く。 ・発表の際の司会者を一人決める。	改めてその代表者の話の内容を思い出しながら、スピーチをよりよくするための構成等について班員全員で話し合わせる。 司会者には司会台本を書かせ、進行の手順をシミュレーションさせておく。
5 〜 7	＜第５〜７時＞（本時の展開参照） 「発表会・心に残った言葉」を行う。（資料３）	一班につき約20分で計６班が行う。
8	＜第８時＞ ・本学習を通しての感想を各自書く。（資料４） ①言葉について ②発表会、感想の交流について ③その他について ・班毎にそれらの感想を用紙にまとめる。	感じたこと、気づいたこと、考えたこと等を発表会の記録も参考にして書かせる。 話し合って一つにまとめるというのではなく各感想を羅列していく形にする。ただし内容が共通するものは一つにまとめさせる。
	＜事後＞ 指導者は各班がまとめたものを印刷し、学習者全員に配布する。	本学習の成果について考察する。

⑤【本時の展開（第７時）】指導案

	学　習　活　動	指導上の留意点
導入	・本時の学習目標について指導者から聞く。 ＜こんなことを目指そう＞ 感想を交流させることにより ①発表者の話のよさをさらに引き出そう。 ②言葉についての考えを深めよう。 ③互いのよさを再発見しよう。 ＜こんなことをがんばろう＞ ④人の話に耳と心を傾けよう。 ⑤聞いて思ったことを自分の言葉で話そう。 ⑥自分の思いを勇気をもって伝えよう。	聞き手の態度や発言が特に大切であることを強調し、よい聞き手がこの発表会を価値あるものにするのだという意識をもたせる。
展開	・発表会「心に残った言葉」を行う。 各班はローテーションにてそれぞれ次の役割を担う。 (ア)　発表する班 (イ)　発表内容について質問や感想を述べ、発表者と直接やりとりする班 (ウ)　(イ)の質問や感想、やりとりについての感想などを述べる班 (エ)　スピーチにふさわしい題名を考えてそれを発表する班	
	①司会者より 始めの挨拶、班内の発表会の報告 ②班代表者によるスピーチを行う。 聞き手はメモをとりながら聞く。 ③質問と感想を出し、発表者とのやりとりを行う。 ④③の質問、感想、やりとりについての感想を出す。 ⑤(エ)の役割の班は、スピーチにふさわしい題名を考え、その題名にした理由とともに発表する。	本日の発表者以外の班員の発表内容を簡単に紹介させる。 メモは話の概要程度でよいことを伝える。質問については話のよさを引き出すことを目的とさせる。 だれのどんな発言がよかったか、それを聞いて、さらにどんなことを思ったかなどを述べさせる。 理由について詳しく述べさせる。スピーチからだけではなく③、④の感想を聞いたところから考えた題名を期待したい。

	学　習　活　動	指導上の留意点
	③～⑤の間、発表班の発表者、司会者以外の班員は他班からの質問、感想、題名と、それをつけた考え等を記録する。 ⑥発表者から感想を述べる。 ⑦司会者から終わりのあいさつを述べる。 （同様の手順でもう一班の発表を行う。）	スピーチをしての感想、スピーチを聞いてもらっての感想など
まとめ	指導者からの講評を聞く。 ①スピーチについて（構成、話し方等） ②司会進行について ③質問・感想について ④質問・感想・やりとりについての感想について ⑤題名とその理由の発表について ⑥みんなで感想を交流したことの価値について	それぞれよかったことを中心に述べ、適宜アドバイスもする。

⑥【本時の評価の観点】

ア．言葉によって伝え合うことの価値を体験的に気づいたか。

イ．言葉の魅力についての考えを深め、言葉を大切にしていこうとする姿勢をもったか。

ウ．自らの体験や思いなどを分かりやすく伝えられたか。

エ．質問や感想を適切に述べ、話し手との交流を図りながら考えを深めたか。

（資料１）

心に残った言葉　学級発表会　記録用紙

二年　二　組　　番　氏名　A

【各班からの発表記録】

班	心に残った言葉	感想や疑問 メモ	言葉について まとめ・考え
5	大工は俺の代でおしまいだなあ…終わりだなあ	息子は自分の夢をかなえたいけど、親として大工を継いでほしいという気持ち。言葉	人を傷つけるのではなく人を感動させたり、喜ばせたりするために使うもの。
4	「はいやるよ」	お年玉を兄ちゃんから初めてもらってとってもうれしかったんだなあ	さりげなくいった言葉で、友達を傷つけてしまうこともあるからきをつけてしゃべる。
1	名前は親が最初にくれる愛情なんだよ	私は自分の名前はあんまり好きじゃないけど H さんの話を聞いてよかったなあと思いました	
6	生きてこれは必ずいいことがある。	言葉によって死のうと思い言葉によって生きようと思った言葉はすごいと思う。	
3	おつかれ	あんまり好きじゃないが、犬の散歩をして「おつかれ」と言われたらとてもうれしい	

（資料２）

国語　班発表プリント

二年(A)組(C)班氏名(B C D E F G)

◎発表のテーマ（発表内容の中心となる事柄をテーマにしてみよう。）

『心と心をつなぐ言葉』

◎班の発表の中で出たこと。

言葉「ありがとう」 内容 さりげないけど、気分が晴れた言葉。	言葉「おはよう」 内容 クラスがれをして初めて友達と話した言葉。
言葉「ずっと友達でいようね」 内容 引越す時に、はげまされた言葉。	言葉「がんばれ」 内容 マラソン大会の時言われてやる気が出た言葉。
言葉「うまくなったな」 内容 つまらなかった部活が楽しくなった。	言葉「」 内容「」

◎班の代表者…名前（ I ）言葉『ずっと友達でいようね』

発表内容

わたしが、今までで一番励まされた言葉は「ずっと友達でいようね」という言葉です。この言葉はわたしが沖縄から東京へ引越しする時に親友から言われた言葉です。わたしはとても落ちこんでいましたが、その言葉によって元気が出ました。そして東京での新しい生活もその言葉を思い出すと前向きな気持ちになれました。今でもその友達とは電話をし合ったり、文通をしたりしています。わたしはこの言葉を通じて友達っていいなあ、友情っていいなあと改めて感じることができました。わたしからもその友達に「ずっと友達でいようね」と言いたいです。

※　発表内容は、聞いている人に内容も、気持ちも伝わるように詳しく書きましょう。

（資料３）

国語　発表聞き取りメモ

二年(B)組　(2)班　氏名〔　　H　　〕

☆他の班の発表を聞いて、自分の感想を発表し合おう。

◎〔6〕班の発表について。

一、発表（スピーチ）を聞きながら、感じたこと、考えたこと、疑問などを心の中でつぶやいてみよう。

（発表内容が深まるようなつぶやきになるよう、しっかりと発表を聞き取ろう。）

【共感】そうそう 本当だよね	【驚き】えっ！ びっくり！	【疑問】えっ？ 【反論】そうかなあ	【発見】良いことを聞いたぞ。	【その他】印象に残った表現や内容
・「すみません」という一言にもいろいろな意味がある。	・「すみません」と言えるおばあさんにおどろきを感じた。（すみません）と言える勇気。			

二、発表を聞いて、自分の体験を思い起こしてみよう。

・Jさんのスピーチを聞いて、「すみません…。」の一言にも人の心を大きく動かす力があり、それは言葉そのものにあるのではなく、おばあさんの心が不自由なのに人を思う気持ちが込められた言葉に力があると思いました。すばらしいお話でした。

（感想）

※ スピーチを発表した班には、スピーチの内容にふさわしい題名をつけて見よう。

【人の気持ちを変える言葉　　】

三、他の班から出された感想などをよく聞いて、良いものを見つけていこう。

（よい意見、よい質問と思われる発言、自分と同じ、違う感想、やり取りの中でいいと思われたこと、など。）

他の班から出された感想や体験について、自分が思ったこと。

・「すみません」や「ありがとう」はよく聞く言葉だけどよく聞く言葉だからこそ、言われて「うれしい。」という気持ちになるのかなあと実感しました。

「自分の体験」姉妹校の中国人の甘のきのこ。ソーダなど

（資料４）

「心に残る言葉」感想文

2年（　）組（　）番氏名〔　　〕

☆「心に残る言葉」の授業を受けて、自分が感じたこと、考えさせられたことなどを書いてみよう。

私は色々な言葉を使って生活していますが、その全てを考えて考えてしゃべってるわけではありません。ただ友達などが落ち込んでいる時は何かはげみになる言葉をかけてあげられたらなぁと考えることがあります。だけど今回の授業でみんなにとって心に残った言葉というのは、私達がいつも使っている、本当に何気ない一言だということが分かりました。考えて無理やり出した言葉より、心からふっと出た言葉の方が相手の心にも響くのかなと思いました。周りの人にかけてもらったうれしい言葉をいっぱい吸収して、たくさんの言葉を心に受めておきたいです。そしてその言葉を心からみんなに返せるようになりたいです。

「心に残る言葉」感想文

2年（　）組（　）番氏名〔　　〕

☆「心に残る言葉」の授業を受けて、自分が感じたこと、考えさせられたことなどを書いてみよう。

言葉って、本当に大切だし、素晴らしいものなんだと、あらためて思った。一言の言葉にも、いろんな意味があることや、その時の状況などによって、相手の感じ方が違うことなど、不思議だなと思うことが多かった。そして、言葉は、落ちこんでいたのをうれしい気持にさせたりなど相手の心を動かす、すごい力を持っているものだと思った。「言葉の重み」の授業をして、私がまだ言葉というものを、全然使いこなせていないことも分かった。大きな力を持つものだからこそ、もっともっと深めて、いろんな意味で、勉強していきたいと思った。そして、人との、コミュニケーションをとる、方法として、大いに活用していきたいと思った。

(3) まとめ

本分科会では、「心に残る言葉」という単元を特設し、言葉の魅力を考えることを通して、互いの思いや考えを伝え合う力を育てる指導法について研究を進めた。ここでは、数回の検証授業を行いながら改善されて得られた成果をまとめてみる。

① 考　察

ア　導入教材について

「美味しいよ」という感謝の言葉が、その発する者と受け止める者の生きてきた背景を背負って、さらに重みのある、人の心を打つものになることがよく理解できる文章で、導入に適した教材であったと言える。

イ　学習者自身の言葉の感動体験を掘り起こす活動について

導入教材の厳選、感動体験についてのアンケートを試みた。当初、感動体験がないと言っていた学習者の中にも、アンケート結果を見ることにより新たな視点で自分の体験を振り返ることができた者もあり、効果的な取り組みであると思われる。

ウ　伝え合いの活動について

- 班の中での発表会や学級発表会の準備をする活動では、伝えたいことをいかに分かりやすく発表するか、文章表現、音声表現の両面から検討させることができた。
- よい聞き手を育てるために各班に役割を与え、話し手の心の中にあるものを察するとともに、自らの思いや実体験を語るという積極的に交流する姿勢をもたせようとした。学習者自身の体験を素材にしたということもあり、真摯な気持ちで受け止めようとしたり、お互いを認め合い、共感する感想や相手を思いやる発言もみられた。

エ　言葉の魅力を考えさせることに関して

学習者自身の身近な事柄から考えさせたことにより、より現実的なものとして言葉の魅力やその重さを実感することができた。また、言葉の多様性について考えたり、今後の自分の言葉の使い方について考えをもつことができた。

② 今後の課題

ア　話し合いを進める上で中心となる司会者の育成、聞く側の育成、話し合いの基本的な手順を、日常的、計画的に指導しておく必要がある。

イ　本当に伝えたいと思われる内容を構成しなければ、上辺だけの画一的な発言しか得られない。受け止める側の心を揺さぶる様々な意見や考えが生まれるような話材でなければなかなか意欲的な交流は期待できない。

ウ　自分の体験を語るという内容上の性格から、自己開示をしたがらない生徒もいる。その際には、人権の問題もあるので、取り扱いには十分な注意を必要とする。

また、今後、真剣に伝えようとする必然性のある話材を指導者がどのように設定すればよいのか、発表の形式も含めて考えていかなければならない。

エ　発表会の中で、指導者のかかわり方についていっそう検討していきたい。

Ⅳ　研究のまとめと今後の課題

本年度は、『互いの思いや考えを伝え合う力を育てる指導法の工夫』を研究主題として研究を進めてきた。私たちが目指した「伝え合う力を育てる」とは、ディベートやパネルディスカッション等で培う論理的な表現力ではなく、人間関係を豊かにしていくためのコミュニケーション能力としての表現力を育て、高めていくことである。そのために、他人の体験を聞くことをとおして、自分の視野をさらに広げ、考えを深め、その深めたものをさらに他に分かるように伝えるという学習活動を進めていく中で、お互いが共鳴したり、共感し合いながら相手の気持ちを考え、理解しようとしていく姿勢を身につけさせていこうと考えた。

１班では、戦争を背景とする作品「大人になれなかった弟たちに…」を、地域に住む戦争体験者である異世代の人と一緒に読む場を設けた。立場も世代も大きく違う者同士が一つの作品を読み合い、その時代背景、情景描写、登場人物などについての話を互いに聞き合い語り合うという活動を通して、コミュニケーション能力を身につけることができ同時に知り得なかった多くのことを知ることができ、いろいろな角度から作品をとらえられ、新たな感動を抱きながら読み深めていくことができた。

２班では、言葉の重みに着目させながら互いの考えを伝え合う力を育てるために、感想を交流し合うことを中心に学習活動を進めた。この活動によって発表者は伝えようという意識をもって発表でき、聞く側も個人の体験を興味深く聞くことができた。また他の人の感想を聞く中で共感したり、新たな感想をもち、自分の考えをさらに深めることができた。また、言葉の感動体験を掘り起こす活動の中で言葉の魅力や言葉の重みについての認識を深め、言葉を大切にしていこうとする姿勢を身につける動機付けになった。

これらの取り組みの結果、生徒は相手の話に関心をもって聞き、それに対する自分の考えを互いに伝え合い、また互いの考えを受容し合うことによってさらに視野を広げることができ、伝え合う力が身についたと考える。

今後の課題として次のようなことがあげられる。

○話し合いの形式を作ったり、司会者を育成していくなど、話し合いを進める上で基本的な取り組み方や話し合いの手順を計画的に指導していく必要がある。

○「伝え合う力」を育てるためには、まず「伝えたいこと」を考える力を身につけさせることである。ただ、生徒の発達段階の中で、「伝えたいこと」はあるが自己開示をしたがらない現実があり、またプライバシーに関わることもあるので内容についての配慮が必要である。

○音声言語を中心とした取組みについては教師側の姿勢にも課題は残されている。生徒を指導していく立場として、教師自身もさらに「伝え合う力」を身につけていく努力が必要である。

○また、総合的な学習における国語科の役割は大きい。今後の国語科の在り方として、総合的な学習を視野に入れながら基礎・基本を身につけさせる取組みを進めていくべきである。